
国際島嶼教育研究センター研究会発表要旨

第 117 回 2011 年 9 月 13 日

国際交流における日本の特殊性

加藤泰久

(鹿児島大学国際戦略本部)

日本は明治維新前後の開国及び近代化に関する 150 年以上の歴史があるにもかかわらず、今、各分野において「国際化」を改めて促進しようとしている。しかし、国際化という言葉には、これまで国際的な関わりがなかったので、国際的な活動を始めようという響きさえある。この背景には、我々に必要なものを、近代化活動或いは欧米化活動を通じて、これまで積極的に受け入れながらも、それ以外の異文化理解を含めた国際的な事情を日常生活から排除してきた歴史がある。日本では、国際化に対する必要性を「出島の（非日常的）」に扱い、「日本は、海外に頼らなくてもやっていける。」という考え方が、現在のパラダイス鎖国の考え方の背景にあると思われる。

第 118 回 2011 年 10 月 17 日

ケラマジカと島の子どもたち

遠藤 晃

(南九州大学人間発達学部子ども教育学科)

ケラマジカは、400 年ほど前に薩摩から琉球に運ばれたニホンジカの末裔と考えられ、当時の琉球と薩摩、中国の関係を見るうえでの貴重な生き証人として、国の天然記念物にも指定されている。生態学的には、亜熱帯環境でどのようなシカの社会構造が展開されるか、非常に興味深い。10 年ほど前から座間味村の慶留間小学校では、3、4 年生の総合学習でケラマジカ研究が始まり、今では毎年、沖縄の生物学会で、子どもたちが大勢の専門家を前に、その研究成果を発表している。本研究会では、ケラマジカの

生態、それを研究する子どもたちの学びのプロセスとその成果を紹介し、離島の小規模校が持つ教育における優位性についてお話しする。

第 119 回 2011 年 11 月 14 日

「理想の地」を求め災害に遭遇する一被害を受けた博物館のひとりごと—

原野耕三

(財団法人奄美文化財団原野農芸博物館)

当館は 2010 年 10 月 20 日の奄美豪雨で大規模な「土石流」が発生し博物館資料（とくに展示資料）に壊滅的被害を受けた。

長年にわたり大阪にて博物館活動を行ってきた当館が「自然を求め」奄美の地に活動場所を変えた。その訳は大変ユニーク。「奄美は空気がいい、水もいい。それはよい森林があり、よい山があるからだ。」と云う先代の「こだわり」が移転の「決め手」となった。施設よりも、それをとり巻く環境を重視し、はじめから交通の利便性・観光客などを求めなかった。このようなことよりも、博物館がもつ公共性を活用して、いかに「自然を守るか」ということに重点をおき、父・子・孫にわたって展開してきた。

しかしこのたびの災害によって窮地にたたされている。隣接地の山崩れの原因は本当に単なる自然災害といえるであろうか。「奄振の置き土産」ではなかろうか。

第 120 回 2011 年 12 月 19 日

バングラデシュにおける水産業と国民経済への貢献

Zoarder Faruque Ahmed

(国際島嶼教育研究センター)

バングラデシュは、多種多様な漁場環境が生

み出す水産資源によって豊かさを享受している。バングラデシュの主要な水産資源は、内水面、汽水域、海面の3つに大別できる。漁獲量は1980年から2008年にかけて毎年約3.6%の伸びを見せてきたが、漁獲量増加の多くはエビ養殖や海面での漁業によってもたらされてきた。

漁業部門は長らく国民経済へ重要な役割を果たしている。漁業は、食料の供給と消費、栄養バランス、雇用機会の提供、輸出などを通じて、バングラデシュ経済へ大きな貢献をしている。2003/2004年の漁業統計によると、GDPの4.91%が漁業生産によるものである。この数値はSAARC加盟国のなかで最も高いものとなっている。しかし、この数値には、水産加工業や輸送、マーケティングなど水産関連産業による生産金額は含まれていないことから、GDPに占める水産関連産業の割合はもう少し高いものと考えられる。また、漁業部門はバングラデシュにおける輸出金額全体の5.7%を占める。動物性タンパク質の全摂取量の63%を占める。約10%の人々が漁業に関連した仕事に従事している。

バングラデシュ政府は、バングラデシュの国民に動物性タンパク質を継続的に供給することを目的に、水産資源の保全と管理、水産資源の開発、漁業者の社会経済的状況の改善、地方の失業者への雇用機会の創出、エビなどの水産関連製品の輸出拡大による外貨獲得を目指した活動を展開している。

第121回 2012年1月16日
植物の生活型からみた海岸植生の生態～
チューク諸島と南西諸島

川西基博
(鹿児島大学教育学部)

海岸植生とは、海と陸の境界域に成立する独特な植生であり、島嶼の景観を特徴づける重要な構成要素である。一般に、海岸は土壌の発達

が悪く栄養に乏しい、塩分濃度が高い、風害を受けやすい、飛砂や崖の崩壊など立地が不安定であるなど、植物の生育にとっては厳しい環境であるといつてよく、内陸部に比べて単純な植物群落が成立することが多い。海岸植生の種組成・構造は地形や地理的条件に応じて変化し、地域的な違いがみとれるが、その違いの一部は各種の生活型と環境との関係から理解することができる。本発表では、チューク諸島における海岸植生の種組成と生活型組成を紹介し、南西諸島の海岸植生との比較を通して、両地域の海岸植生の共通性と多様性について検討したい。

第122回 2012年2月9日
動物化石の同位体分析により考察する東
シナ海周辺の初期家畜文化の発展

南川雅男
(北海道大学大学院地球環境科学研究院)

原発事故で放出された放射性核種は、図らずも自然界と人間生活の結びつきを確認させるきっかけとなったが、人間と自然界の物質の関係の深さは、容易に見えにくいものである。一方、近年、自然生態系における物質共有の程度や影響範囲は、炭素や窒素の安定同位体によって研究されるようになってきた。もともと自然界に不均一に存在している炭素と窒素の安定同位体は、生々流転を経てもなお履歴にしたがった特徴を示すことから、元素の由来をたどるトレーサーにすることができるが、動植物や人類生態の研究で示されてきた。

この講演では、東シナ海を交易圏とする先史時代に、東シナ海周辺の人類集団が、どのように交流していたかを明らかにした研究を紹介する。一般に、野性の草食動物は、気候風土に適応した植物を基点とする食物連鎖によって規定されるため、同位体組成が地域的に特徴づけられているが、家畜化された動物個体は人為的に食物連鎖が変えられてしまい、その違いは

動物骨のタンパク質の炭素・窒素の同位体組成で見分けることができる。東シナ海を囲む島嶼と大陸、半島間の家畜の同位体分布は変化に富んでおり、家畜飼育の伝搬や普及過程の地域差を考えるうえで示唆にとんだ情報を与えてくれる。これらの事例を紹介しながら、同位体研究法の長短についても触れたい。

第 123 回 2012 年 2 月 20 日
海に魅せられて

大木公彦
(鹿児島大学総合研究博物館)

1970 年代前半、鹿児島湾周辺地域の第四系の構造発達史を解明するために地質調査を行ったが、同時に水産学部のかごしま丸や敬天丸で海底表層堆積物の採取も行っていた。最終的に、鹿児島湾から採取した海底表層堆積物の粒度組成や底生有孔虫群集解析によって鹿児島湾の堆積環境について博士論文としてまとめ、1989 年に南太平洋海域研究センター(現在の国際島嶼教育研究センター)の「South Pacific Study」に投稿した。一方、1981~93 年に早坂先生を代表とする科研費海外学術調査で南太平洋に生息する生きた化石「オウムガイ」の調査に携わった。調査結果は 5 冊の「Occasional Papers」で報告された。これら 2 つの調査の研究結果の概要を、思い出も含めてお話ししたい。

第 124 回 2012 年 2 月 29 日
実践・教育法・理論—太平洋諸島民研究についての一論評—

キース L カマチョ
(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)

本発表では、米国本土、とりわけカリフォルニアにおける太平洋諸島民研究の形成について探究する。太平洋諸島民研究は、現在ホットな研究領域として、人類学や地域研究といった

冷戦の刻印を受けた先行研究とともに、ある部分では太平洋研究や太平洋諸島研究の流れを汲んでいる。こうした関連分野においては、太平洋諸島民らはしばしば、個別の土着共同体として理解され、彼らの場所や権力をめぐる観念は、太平洋のそれぞれの環礁や群島のうちに存するものとされてきた。しかし、ディアスポラ研究や移民研究の成果にもかかわらず、こうした地域を離れた、特にアメリカ本土在住の太平洋諸島民の共同体に関する研究はほとんど手つかずの状態である。そこで本発表では、こうした新領域の研究発表や議論がもっとも活発に展開されている地域の一つであるカリフォルニアにおいて、太平洋諸島民研究が学術的、歴史的、政治的に形成される様相を検討したい。こうした議論の中心には、民族研究や先住民研究への方法論的転回と、そこでの分析のカテゴリーや制度上の組織力や政治的实践が、太平洋諸島民による脱植民地化と社会的公平性への要求を進展させた(あるいはさせなかった)方法への方法論的転回とが存在しているのである。

第 125 回 2012 年 3 月 12 日
サテライト教室と私の奄美研究

山田 誠
(鹿児島大学法文学部)

近年、鹿児島大学は奄美をフィールドとする教育及び研究に大きな力を投入している。初期の段階で、この取り組みにかかわった一人として当時を振り返れば、偶然に大学を取り巻く環境の劇的な変化に立ち会うことになったというのが率直な実感である。

一時期、奄美をテーマにして科学研究補助金による研究、大学の全学プロジェクトが重なり、それに並行して奄美にサテライト教室が開設された。だが、一連の研究と大学院のサテライト教育は別々の事情で誕生し、それぞれ自立した展開をたどってきた。その事実経緯にもかか

(10) 島嶼研だより No. 63

わらず、私が仕掛け人の一人として加わった当時の一連の活動は、奄美群島における鹿児島大学のプレゼンスを高めるのに、結果として少なくない貢献をしたと自負している。というのは、それまで奄美における鹿児島大学の位置は、過去の経緯や他大学がいち早く継続的な関係を築いていたこともあり、あまり良好ではなかったからである。

私個人の奄美研究に関していえば、全学プロ

ジェクトの前には物議をかもした1本の調査研究があるだけであった。この間、奄美群島にずいぶんとかけてたが、ほとんどの場合、サテライト教室の授業や打ち合わせ・会議などであって、調査に回った機会は数えるほどしかない。結局、奄美についてもっとも深く学ぶ機会となったのは、受講生が調べてきて報告する授業だといえる。この点で、受講生の人たちにはとても感謝している。